



Amy Tan : 中国系アメリカ女性作家の出現

著者	恩地 幸
雑誌名	主流
号	53
ページ	201-208
発行年	1992-02-25
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015102

書評

Amy Tan——中国系アメリカ女性作家の出現——

The Joy Luck Club. New York: Ivy Books, 1989. x+332pp.

The Kitchen God's Wife. London: HarperCollins Publishers, 1991. 415pp.

恩 地 幸

I

近年のアメリカ文学の潮流には、黒人女性作家の活躍に目をみはるものがあるが、黒人だけでなく、Native Americans, Asian Americans, Hispanics などからも、作家が誕生してきている。マイノリティであり、かつ女性の作家が卓越した才能を発揮しはじめている。

彼女たちは、男性的価値規準、伝統的社会規範すなわち、家父長的キリスト教的規範の枠を越えて、自分たちの言葉で、自分たちの肉化された体験をつむぎだしつつある。彼女たちの語りに耳をかたむけることで、我々はいままで見えなかった新しいアメリカを体験しつつあるといえるだろう。白人キリスト教文化が、ある意味では、主流の場を侵食されつつある現代のアメリカで、様々な ethnic group の人々が、自らを語り始めている。そういった人々の豊かな語りが、また新たなアメリカをうみだしてゆくのである。

黒人女性自らが、自分たちの体験の真実を語り、白人アメリカ社会に鋭い刃をむけたのと同様に、アジア系女性の体験の真実は、有能な語り手を得て、見事に作品化された。こういった有能な語り手の一人が、1952年、カリフォルニア生まれの中国系女性、Amy Tan である。

1989年に出版された。第一作、*The Joy Luck Club* で注目を集め、1991年には、二作目の *The Kitchen God's Wife* が出版されている。本稿では、この二作品を紹介し、これらの作品の持つ重要性を検討したい。

II

The Joy Luck Club は七人の中国系女性の語りによって構成されている。四人のアメリカ生まれの娘たちと、三人の中国生まれの、彼女たちの母親たちである。八人目であり、タイトルになっているマージャン・クラブをつくった母親、Suyuan Woo は最近亡くなったという設定で、彼女の死を契機に、娘である Jing-mei が、母親の席を引き継ぐことになる。

作者と同年代と思われる Jing-mei は母の死後、ある日クラブに呼ばれ母親の過去にまつわる重大な事実を聞かされ、衝撃を受ける。話は、母、Suyuan が日本軍侵攻直前、中国の桂林で最初の結婚をしていた頃にさかのぼる。彼女には幼い双子の娘がいた。日本軍侵攻にともなって、彼女は娘をつれて北部にいる夫のもとへ逃げるが、途上どうしても二人の娘を抱いて歩き続けることができず、身元を証明するための写真、宝石などとともに二人をおきざりにする。戦争の混乱のなか、最初の夫と死別し、二人の娘を捜すがめぐりあえず、Suyuan は新しい夫 (Jing-mei の父親) とともにアメリカへ渡り、新生活を始める。しかし彼女はその後この娘たちを捜し続けていて、死の直後ようやく消息がつかめる。

サンフランシスコにある Joy Luck Club は、マージャンでかけた金をもとに株や金きんに投資しているが、母親の友人であるクラブのメンバーたちは、費用をクラブが出すから、亡くなった母親の遺志をとげるため、娘 Jing-mei に中国へ行って half-sisters に会うように告げる。

亡くなった Suyuan、およびクラブの他の三人の母親もすべて中国生まれで、戦争の混乱と悲劇をへて、1940年代後半にアメリカへ命からがら逃げてきた人々であった。彼女たちは新移民を援助する教会を通じて知りあい、社交の場として Joy Luck Club を持ち、アメリカでともに生きのびてきた。

作品は大きく四つのセクションにわかれていて、第一セクションは、Jing-mei の語る第一話を除いて、An-mei Hsu, Lindo Jong, Ying-ying St.

Clair, この三人の母たちの子供の頃,あるいは娘時代の回想である。1910年代生まれの母たちの子供時代の中国は,いまだ前近代の闇のなかにあった。封建的家族制度のもと,娘たちは親の財産の一部同様に扱われ,顔も見ることのない相手と親同志の一存で結婚させられていた。自由な意志など全くなく,婚家に忠誠を誓い,まるで夫と夫の家族の奴隷であった。一夫多妻であり,男子にのみ家の継承権があるわけで,男子を産まなければ妻としての価値もなかった。このような屈辱的状況を, An-mei Hsu は自分の追放された母親の姿を語り, Lindo Jong は自分自身の最初の結婚を語ることによって描き出している。

つらい過去を胸に秘め,戦後の混乱のなか中国を脱出し,母親たちはアメリカに渡り,そして娘を産む。娘たちは母の中国語をかるうじて理解しても自分たちは話せない。彼女たちの第一言語はあくまで英語であり,アメリカ人として成長してゆく。

娘たちにとって母親は,欠陥だらけの英語しか話せない頑固者のむつかしい存在である。アメリカ的合理主義を身につけた娘たちにとって,母親は過去の亡霊のようでもあり,中国という東洋文化の化身でもある。迷信深く,家族主義に徹し,要求が強く,干渉的で娘の人生をコントロールしようとする。こういった中国の母たちがアメリカ人である娘たちにとって,いかに葛藤をともしなう存在であるかを娘たちが語り,また本当に母を知っているのだろうかと自問するのが,作品の第二セクションである。

第三セクションは成長した中国人の娘が,白人男性と結婚し,悩む心情がまた娘たちの語りで描かれる。第四セクションは,同じエピソードを母親が語るという構成になっていて,娘の結婚生活を母の視点で洞察している。

中国人の母親と白人アメリカ人の義理の息子というのは永遠に理解しあえない関係であろうか。母は娘夫婦の浅薄な愛情関係をみぬいて,娘に妥協ではなく戦う意志を持つことをうながす。そのため,娘に力をあたえるため,いままで語ることをさけてきた自分の過去を娘に伝える決意をする。

Joy Luck Club の母たちのなかば命令をうけて、中国へ行く Jing-mei も母の生存中は母の人生をよく理解していたわけではなかったし、母もアメリカ生まれ、アメリカ育ちの娘とのあいだにある距離を自覚していた。作品の最終話で Jing-mei は半信半疑で half-sisters に会うのだが、出会った瞬間に彼女のなかに大きな感動が生まれる。三人そろってポラロイド写真を父にとってもらい、写真ができあがるのを三人でみつめる。そこには母によく似た三人の娘の姿があった。そこには母の積年の悲願がうつしだされていた。

アメリカ生まれの娘たちは、現代アメリカを生きのびる力を中国人の母からあたえられるのである。中国人の母は中国の大地、歴史、文化をその魂に宿している。中国人の母の魂を娘たちは受けつぐことで再生への力を得るのである。前近代的、悲劇的過去を生きた母を知ることを通じて自分自身を知るという体験を得るのだ。自らのルーツとして母の背負う歴史の重さを体感することが、娘たちの生きる指針となってゆくのである。

III

1991年発行の *The Kitchen God's Wife* も同様に母と娘の物語である。娘 Pearl と母 Winnie が交代で語るなのであるが、作品の大半は、母が娘に自分の過去を語る部分 (p. 61~p. 394) でしめられている。作品の11ページから57ページまでは娘 Pearl の語りで、中国人女性が白人男性と結婚し、二人の娘をもうけ仕事も充実していて、サンフランシスコのチャイナタウンに住む母親とは、物理的にも精神的にも距離をおいて暮らしていることが明らかにされる。

東洋的家族主義のもと、プライベートへの配慮が少なく、なにかという
と家族、友人 (すなわち隣人) の集まりに参加を要求されて、うっとおしく
感じる娘夫婦の心情がよく描かれている。Pearl は自分が “multiple scler-
osis” (硬化症) という病^{でまい}をえた身であることを母に隠している。病気を知っ
た母の動揺や、迷信がかった対応の仕方にたえられないのだ。

母の Winnie と友人の Helen はチャイナタウンで花屋を共同経営している。中国にいた時も、アメリカへ来てからも二人は緊密な家族同然のつきあいをしてきた。ある日 Helen は、自分が脳腫瘍にかかっていることと死が近いと思ひこみ、秘密をかかえて死後の世界へ旅立つことはできないと宣言し、自分と Winnie の過去のすべてをあかすと言ひ出す。

一方 Pearl は母を負担に思ひながらも、母とのあいだには膨大な距離が存在し、それゆゑ母娘が人生の重要な事柄を共有するのをさまたげていると感じている。

この距離は母親が四十年間、娘に隠してきた秘密に起因している。Pearl の本当の父親は、Winnie の中国での最初の夫、Wen Fu なのであった。悪魔のような男であった Wen Fu が中国で最近死んだという情報もあり、Winnie は自分の口から自分の過去のすべてを娘に話す決意をする。

Winnie の人生は、Kitchen God（民間信仰において人々の幸運、不運をつかさどる神）に最悪の運をさだめられたかのごとく、出生から娘時代、結婚、妊娠、出産まで不運の連続であった。Winnie の母の悲しい失踪、親戚にあずけられ、父親から見捨てられた娘時代、あまりに無知であったことにはじまる、悪魔のような男との不幸な結婚。最初の子は死産、次の子は夫の暴力によって精神の均衡を失い薄弱児となり病死する。次は男の子が生まれるが戦争の混乱のなか病死する。Helen とは夫同志がパイロットであったことから、戦争の続いた何年もの期間を行動をともにしてきた。Winnie は教育程度も高く上流の育ちだが、Helen は貧農の出身で字もろくに読めない。Helen の無神経さやどん欲さに腹をたてながらも、二人の女性は互いに助けあい、生きぬいてゆく。

Winnie は二番目の夫、中国系アメリカ人の、Jimmy Louie と中国で出会い、恋をし、事実上 Wen Fu と離婚し彼と結婚するが、執拗に前夫につきまとわれ、投獄のうきめにまであう。戦争後、夫 Jimmy のもとへ旅立つ前日に彼女はまたもや Wen Fu に強姦される。航空券までうばわれそうにな

るが、取り返し、アメリカへ旅立つ。この最後の Wen Fu に受けた屈辱と暴力の結果が Pearl であった。

Pearl は自分の本当の父親が、母を苦しめるだけ苦しめた男であったことを聞いて、また母の過去を知ってどのように感じたのだろうか。Pearl の語りにおいて彼女の内面が語られることはないが、作品の最後で母に贈られた女神像を見て涙を流すところから、彼女が母の絶対的な愛を確認し感動していることが十分に察せられる。

この像は Mrs. Kitchen God ではなく Lady Sorrowfree と名付けられている。この像は母の化身であり、この像をそばにおくことで母がいつも見守ってくれると娘は感じる。互いの強い結びつきを実感することから、母も娘も解放感にみちた安らぎと喜びを得るのである。

IV

近年においてこそ女性作家の活躍も顕著になってきたとはいえ、アメリカ文学の主流は白人男性作家によってつねに形成されてきたといえよう。そして Mark Twain, Ernest Hemingway, Saul Bellow にいたるまで、白人男性作家は、父と息子の物語を語ってきた。

現実には父と息子の物語と同数の母と娘の物語が存在したはずなのに、女たちの物語は近年にいたるまでアメリカ小説のジャンルからぬけおちている感がつよい。

19世紀には、Harriet Beecher Stowe をはじめ何人も女性作家が活躍し、彼女たちの作品はベストセラーとなっていたことは一般にも知られていよう。しかし彼女たちの作品は、「感傷的」、「家庭的」といった言葉でひとくりにされ、いわゆるアメリカの文学のカノンからしめだされてきた。

こういった作品の再評価は、1960年代の終わりに始まり、70年代、80年代を通じて飛躍的發展をとげてきたフェミニズム批評の到来を待たねばならなかった。フェミニストたちによる再読作業が進む中、男性的価値が優勢であっ

た批評世界の地図も徐々にぬりかえられつつある。そして父と息子の系譜にかわって母と娘の関係がうみだす女性文化に光があてられるようになったといえよう。

しかし19世紀に作品を発表できたのは少数の白人女性に限られていたわけで、女性文化は白人女性文化にすぎなかった。アメリカにおいて真の意味で黒人をはじめ様々な階層の様々な人種の女性による物語の記録と創造が実現されるようになるには、長い苦難の道程をへねばならなかった。

1960年代にはいって女性運動は急進的に発展するが、黒人女性は白人女性とのあいだの人種間格差、階級差に苦しまねばならなかったし、平等を求める公民権運動のまっただなかであって白人、黒人とを問わず男性優位主義と戦わねばならなかった。しかし racism, sexism, この両方との壮絶な闘いのなかで黒人女性は成長し、Alice Walker, Toni Morrison をはじめとする優秀な女性作家を輩出してきた。彼女たちの作品のなかで主要なテーマとなるのは女性同志の絆であり、対立であり、愛である。友人、姉妹、母娘は、時に相克し、互いに対する愛憎に苦しみ、真実にめざめ、成長してゆく。作品には男性的価値に汚染されない女たちのなまの言葉が記録されている。

Amy Tan, Maxine Hong Kingston 等中国系、Louise Erdrich のような Native American の女性作家の出現と活躍は、黒人女性作家の活躍と無縁ではなく、フェミニズムを確固とした^{いしずえ}礎として、延長線上にあると考えてよいであろう。アメリカ社会のなかで、抑圧され、消滅を余儀なくされつつあるそれぞれの文化の独自性を守り、忘れ去られてゆく過去に永遠性をあたえようとする点において、彼女たちは共通性がある。

Amy Tan の描く中国人の母は、女性にとってはもちろん男性にとっても不滅の希望、人間の強さを具現している。また、移民体験を多かれ少なかれ内在させるすべてのアメリカ人にとって、彼女の描く世界は、単なるエグゾチックなものへの興味を越えて、人間関係のあり様に対して再考をうながすものになるであろう。

様々な人種、文化の存在は、アメリカ社会のダイナミズムの源泉であるが、同時に時として対立をうみ、否定的、暴力的感情をうみだす。一方 Amy Tan の作品は、東洋的受容の精神を示すことで柔軟な弾力を感じさせる。作品全体にただよぶ女性文化と東洋文化の融合した独特のやさしい情感が、文化の壁をこえて、アメリカ人読者を魅了したといえるであろう。

アメリカ的合理主義では解決できないものが多すぎる現代において、アメリカ文学は、実に多様性を増し、多元化してゆく傾向をみせているようである。Amy Tan はこのような流れに身をおく一旗手として重要な存在であり、今後も活躍が期待されている。